

# 高退協文芸

## 短歌

コロナウイルス

山本品子

目に見えぬウイルスゆえに人類は滅亡の淵をさまよいており  
貪べるにも事欠く人の出で来たりウイルスによる派遣切りに遭い  
娘よりマスク百枚送りくる七十九歳吾がバースデイに

連帯のとき

叶岡淑子

第三次世界大戦さながらの新型コロナウイルスと人類の今  
核廃絶いまだ果たせぬ地球への警鐘なりやコロナの猛威  
国を超え試練乗り越え人類は世界平和へ連帯のとき

たけさん

田上悦子

コロナ禍の面会謝絶に兄嫁はがん病む兄を家へひきとる  
剛の字を持つに剛範さん四月七日早も逝きたり七十五歳  
ミルクなくコメの汁にて育ちし兄の最後に見し世も戦時の如し

## 俳句

花蘇鉄の四季

小澤 幸泉

冬の山団地の友はみな逝きし  
果しなくみ国の春はまだ遠い  
つかぬ間の友との別れ春の街  
もの思ふ我れの心に春の閑  
ふるさとの桜の祭りが届けられ  
ひな飾り明るくつつむ老いの部屋

## 川柳

帆傘集

小澤幸泉

悔しいが八十代を生きてやる  
生かされてまた新年を生きてゆく  
本物がほしいサンブルモウ要らぬ  
目が覚める今朝も愛妻文句言う  
年重ね妻の支えで初歩き  
涙眼にかすむみ国の遠過ぎる  
眼が覚めるまだまだ朝がやって来ぬ  
生きていてよかった君にまた会えた

# アメリカの外交政策を理解するために

## (その2) RealismとIdealism

吉岡太史

前回はstatecraftの概念を紹介し、米国がその外交政策において自国の人的・物的資源を組み合わせ、自らの国益(端的に言えば安全保障と政治的・経済的・文化的利益)とその国益に資する国際社会の「平和と安定」を追求することを説明しました。今回は、そうした米国の外交政策を特徴づける Realism (現実主義) と Idealism (理想主義) の行動原理を取り上げます。

あれ? Idealismではなく Liberalismではないのか、と思われる方もおられると思います。実際、国際関係に関する教科書では主として Realism と Liberalism を対置して論じることが多いのですが、私がワシントンDCで学んだ2年間、学校で Liberalism はほとんど使用されず、それが含意する自由主義、多国間主義、国際協調主義を志向する行動は Idealism としてくられていました。入学願書提出の際に課された小論文も Realism と Idealism を比較・検討するものでした。

前置きが長くなりました。まずは Realism について説明します。米国の指導者、高官、研究者、及び市民の中には、国家は自国の利益を第一に考えて行動するのだから国際協調は必ずしも機能せず、結局は国力とりわけ軍事力が国益を守る最も重要な手段になると考える人びとがいます。彼らはしかし、軍事力の限界も踏まえ、その行使による自国の損失を最小限に抑えること、また抑止力としての軍事力の増強は図っても、実際の戦闘に参加することなく国益を守ろうとする立場をとることもあります。他国への干渉にも比較的慎重です。

歴史的な例をあげれば、外交問題にかかわることを避け国力と経済の発展に傾注するよう説いた初代大統領ジョージ・ワシントンの外交政策(彼の「辞任挨拶」は今なお機会あるごとに取り上げられます)、第一次及び第二次世界大戦参戦への米国の慎重な姿勢、またウィルソン大統領の国際連盟設立・加盟提案を否決したアメリカの議会・市民の動きなどをあげることができます。

近年では、イラク戦争に先立つ2002年9月、Realismの立場に立つ国際政治学者として著名なジョン・ミアシャイマーをはじめとする33名の研究者たちが「イラクとの戦争は米国の国益にそぐわない」と題する新聞広告をニューヨーク・タイムズに発表しました(その警告は実際のイラク戦争後のイラクの泥沼的な状態を言い当てていました)。

他方、Idealismを志向する指導者、高官、アドバイザーたちは、国益を第一とするのはRealismと同様ですが、それは軍事力だけでなく、自由と民主主義を共有する国際協調主義、そしてその先頭に立つ米国の強いリーダーシップによって守られると考えます。

ここで注意したいのは、国際協調を掲げるIdealismが必ずしも軍事力を否定していない点です。むしろ、彼らの理想すなわち自由と民主主義を世界にひろげるためには力の行使も必要だとする点です。とりわけ第二次世界大戦以後の米国大統領や政府高官は多かれ少なかれ、Idealismを受け継いでおり、それがベトナム戦争や近年のアフガン戦争、イラク戦争、そしてテロとの戦いにもつながっていると言えます。例えばブッシュ米大統領はイラク戦争の開戦にあたって、「米国及び連合軍は人びとに自由を与え、世界を重大な危機から救う」と演説しました。

私は留学中、アメリカ外交を専門とするジョン・ティオーニ教授の研究室を訪ねた際、「日本の平和憲法のもとで育った私は、米国の理想主義が軍事力の行使とともにあることに戸惑いを覚えます」と話しました。すると教授は、何を今さら、といった表情を浮かべ、「(軍事力を伴うのは)当然だ」と私の戸惑いを一蹴しました。しかし一方で、アメリカについては、自分たちの理想と、力の行使(力による平和)に頼らざるを得ない現実とのほざまで「これほど自己を苦しめてきた国も他にはなかった」(ヘンリー・キッシンジャー『外交』p.11)との指摘もあります。

さて、現トランプ政権の外交は、このIdealismに挑戦しているように見受けられます。これについてはいずれ議論したいと思います。今回は米国の外交政策を分析するもう一つの方法を取り上げます。



IWP (ワシントンDC) の卒業式の写真  
右端からニコルソン元アフガニスタン駐留米軍司令官、吉岡太史、レンチョウスキー学長(「その1」の原稿で紹介した学長)